

（様式6-A）A. 雑誌発表論文による学位申請の場合

山田 早耶香 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目 Seasonal Variation in Thyroid Function in Over 7,000 Healthy Subjects in an Iodine-sufficient Area and Literature Review

（ヨウ素充足地域における7,000人以上の健常者を対象とした甲状腺機能の季節変動と文献的考察）
Journal of the Endocrine Society, 6(6):bvac054, 2022

Sayaka Yamada, Kazuhiko Horiguchi, Masako Akuzawa, Koji Sakamaki, Yohnosuke Shimomura, Isao Kobayashi, Yoshitaka Andou, Masanobu Yamada

論文の要旨及び判定理由

甲状腺機能の個人の正常なセットポイントへ影響を及ぼす因子の1つに季節変動が予想される。各国で検討がなされてきたが未だ一定した見解が得られておらず、またヨウ素過剰国の日本において健常人を対象とした報告はない。そこで本研究では、人間ドックを受診した甲状腺機能正常群を対象とし、甲状腺機能の季節変動について検討した。7,256例を対象とし、除外基準は 1) 顕性甲状腺中毒症・機能低下症、2) 甲状腺疾患の既往、3) 肝硬変・腎不全患者、4) ステロイド・インスリン使用中の場合とした。血清TSH値の最高値は1月の1.61mIU/mL ($p < 0.01$)、最低値は5月の1.16mIU/mL ($p < 0.01$) であり、順位変換平均分析 (ANOMTR) では1・2・3月に有意に高値を示し、5・6・8月に有意に低値を示した。血清FT3値の最高値は7月の3.39pg/mL ($p < 0.01$)、最低値は1月の2.97pg/mL ($p < 0.01$) であり、ANOMTRでは4～8月に有意に高値、9～12・1月に有意に低値を示した。血清FT4値の中央値は年間を通して変動幅が小さかったが、ANOMTRでは2・3・10・11月に有意に高値、1・4・5・12月に有意に低値と2相性の変化を示した。また、潜在性甲状腺中毒症あるいは潜在性甲状腺機能低下症と診断された人数は月毎に有意差を認め、潜在性甲状腺機能異常症の診断の際には季節変動が影響していることが明らかとなった。

以上より、本研究は多数の健診データを用いて甲状腺機能の季節変動に関する統計学的解析を実施し、その結果が甲状腺機能評価の一助となることを明らかとし、博士（医学）の学位に値するものと判定した。

（審査 2022年11月9日）

審査委員

主査 群馬大学教授（医学系研究科）
応用生理学分野担任 鯉淵 典之 印

副査 群馬大学教授（医学系研究科）
腎臓・リウマチ内科学分野担任 廣村 桂樹 印

副査 群馬大学教授（医学系研究科）
産科婦人科学分野担任 岩瀬 明 印

参考論文

- 1.
- 2.
- 3.